

日ロ関係の前途を規定する両国民の深層心理

藤田 整；V. コジェヴニコフ

はじめに

I. コジェヴニコフ報告（一部省略）

1. 政治面について
2. 経済面について
3. 心理面について
4. 結語

II. 日本側（藤田）のコメント

5. 報告内容へのコメント
6. 日本人の深層心理
7. 日本のかかえる国境紛争

キーワード：日ロ関係、国民の深層心理、北方領土問題

はじめに

2008年11月29～30の両日、京都大学において第24回日ロ極東学術シンポジウム（日本側責任者：藤本和貴夫・大阪経済法科大学学長）が開催された。冷戦末期の1984年に大阪大学を会場として第1回シンポが開催されて以来、1988年を除き毎年開催されて2008年で24回目となる。今回シンポの初日に在ウラジオストクのロシア科学アカデミー極東支部「歴史・考古学・民族

学研究所」の上級研究員 V. コジェヴニコフは、日ロ両国の国際関係について従来になくロシア国民の深層心理にも触れる報告を行った。彼は第2回、私は第1回以来の参加者であり、以下に述べるような彼によるロシア国民の深層心理の説明は、この20年以上の旧知の両国学者が多数在席の会場でなければ、容易に発言できないような率直なものであり、それゆえ貴重なものであったと考える。私は当日の予定討論者であったが、時間制約のため、準備した発言内容のかなりの部分の割愛を余儀なくされた。従って以下、彼の報告原稿（前半の一部を省略）と、それに対する私のコメントを、当日の省略内容をも補充して記す。

* * * *

I. 日ロ関係の将来：楽観主義者、悲観主義者、そして現実主義者の見解

V. コジェヴニコフ⁽¹⁾

逆説的に受け取られるだろうが、私が思うに、日ロ関係⁽²⁾は世界でもっとも安定している。確かに、この安定は独特のものであり、また単

(1) コジェヴニコフ（Vladimir V. Kozhevnikov）は1950年生まれ。現在、ロシア科学アカデミー極東支部：歴史・考古学・民族学研究所の上級研究員。専門は歴史学、日本史、日ロ関係論である。なお紙面の制約により、前半部分のかなりの省略を余儀なくされた。省略したのは、行数で計算して原文のおよそ25%にあたる。なお訳文の中見出し冒頭の数字は原文にはなく、

文章の理解を助けるため、訳者の設けたものである。

なお本報告の全訳は、いずれ『第24回日ロ極東学術シンポジウム報告集』（藤本和貴夫編）として出版される予定である。

(2) 「日本とロシアの関係」を表現する場合、ロシア人は「日ロ関係」（rossijsko-yaponskij ...）と自国を先に書く。2国関係について自国を先に表記するのは、

純なものではない。その理由は何か。この問題に答えるには複合的な接近が必要である。公平な分析のみが状況を理解させ、質的に新しい水準において、これら諸関係の結論への道筋を発見させてくれるだろう。ところで結局、われわれの将来の関係を提示し、想定するという試み、これは原理的に可能なことであろうか。これが重要だというのは、われわれは隣国で、同じく日本海の岸で暮らし、そして隣人は親しくすべきだからである。ところで他方、われわれは隣人なるがゆえに、複雑な関係のなかで生きるべく運命づけられているのではないか。これはもちろん冗談だが、しかしあらゆる冗談には、なにがしかの真実がある。

隣人どうしが親しく生きていくには、お互いに隣人のあれこれの行動の理由を知り、理解しなければならない。それが判れば、新しい関係を結ぶのは容易である。

遺憾ながら現段階の両国関係において、この問題は、より特定の問題に、すなわち「ロシア人と日本人は領土問題について相互に理解できるか」に帰着する。

ロシアにおいても日本においても両国関係の話がおよぶと、まず第1に「領土問題」にだけ話がいくのは周知のことである。私は、これは正しくないと思う。確かにこの問題は存在する。しかし両国関係において、この問題は偶然の産物であり、それは歴史の特定の時期における特定の事情の結果として生じたものであり、しかもこの事情は、あるいは起こりえなかった類のものかも知れない。この問題はより広範で、またより深刻なものである。ちょっとの間、この問題は存在しないものと仮定しよう。その状況においてロシアと日本は相互理解に達しうの

だろうか。例えば第2次大戦の終結まで、この問題は存在しなかったけれども、両国関係は理想とはほど遠かったし、この点、これ以上の説明はいらないだろう。これとは逆に第2次大戦の終結後、領土問題はすでに存在していたのに、ソ日経済関係は成功裡に発展し、そして日本は、ソ連の主要な相手国の一つで、先進国のなかで五指にはいる、そして時には三つにはいる主要な経済的相手国であった。（中略）

ここで両国関係の内容をなす3項目についてテーゼ式に言及したい。この関係は特有の「三脚台」のうえに、いわば鎮座しているのであり、ちなみに三脚とは最も安定感のよい構造である。

以下の話は、両国関係の政治面、経済面、そして心理面にかかわる。そして、もしそこでロ日関係を論ずるとすれば、最後にあげた心理面がたいへん重要な役割を演ずる。

1. 政治面について

記述のように両国のあらゆる関係の主要テーマは領土問題である。そしてしばしば正にこれが両国関係と同義語であり、両国関係の他のすべての面をおおいかくしている。

しかしロ日関係の政治的分野そのものは、領土問題よりもはるかに広い。そしてこの意味においてラヴロフ外相の発言は正しい。

本格的に考えると、現在、ロシアと日本の政治的利害は広範囲の国際問題について近接または一致しており、そのさい本質のみならず、ニュアンスさえそうであるのも稀ではない。国際テロリズム、大量破壊兵器の拡散、麻薬取引、宗教的およびイデオロギー的過激主義、東西の軸、また南北を軸とする紛争、国際関係管理システムの低効率、そこに今日、世界的な金融恐慌ま

↘ 国際的に通常であり、例えば日本人は「日中関係」、同じことを中国人は「中日関係」と呼ぶ。ところで邦訳にした場合、たとえロシア人の書いたものでも「ロ日関係」よりも、「日ロ関係」としたほうが一般に文

章が落ち着くと思われる。しかしここでは同一論文のなかで日ロ両国人の文章が共存・交錯するので、執筆者の区別を明確にするため、ロシア人の執筆部分については原則として「ロ日関係」とする。

たその他の一般的問題が発生し、これら諸問題への対処についてロシアと日本には本質的に見解の相違はなく、かえって協力の可能性というより、その必要がある。中近東、中央アジア、朝鮮半島、中国など、これらが将来においてロシアと日本が政治的に協力する舞台なのである。さらに強調すべきは、ロシアと日本の国際領域における政治的影響力の可能性、経験およびチャネルが相互補完的なことである。そして最後にロシアと日本の国際政治的協力は、すでに今日では、それぞれがきわめて重要とする第3国に関する義務と矛盾しないことである。（中略）

2. 経済面について

ロシアと日本が過去において通商面の重要な相手であった事はまずなかった。20世紀の70年代、日本はソ連の主要な経済的パートナーのうちに入ったが、今日では状況が変わった。統計によると日本には他の多くの重要な通商パートナーがいる。例えば日本は、ロシアの外国貿易高の約3%にあたるが、日本の貿易高におけるロシアの比率はほぼ0.7~1%である。

しかし、ある程度の発展を否定するのは正しくないであろう。それについては日本の中曽根弘文外相も語っている。

過去3年間、両国の経済関係においては質的な前進が見られる。すなわち通商額は3倍に増え、製造工業部門への投資が始まった。日ロ間の通商額が年間300億ドル近くになることも期待される。ソ連時代にはそれが約60億ドルであったことを考慮すると、それは、いま急速な増大の段階にあると言える。通商額においてはG8諸国のなかで、ロシアの通商相手としてドイツ、イタリアに次いで第3位の相手である。来年から始まるとされるロシアからの今後の液化天然ガス供給を勘定に入れると、両国の通商額はさらに増大するであろう。

以上、悪くはないと見えるが、しかしロ日の

貿易構造、つまりロシアは鉱物とエネルギー源を輸出することに、實際上、変化がないのは気がかりである。その細目は非鉄金属と貴金属、魚類と海産物、木材、石炭、それに石油製品である。日本の輸出は自動車、2輪車、小型船で70%を占め、ほかに機械製品と電化商品である。日本のロシアに対する投資額は2005年に1億6620万ドル（サハリン・プロジェクトを含まず）であった。（中略）

何がかくも明瞭に、また相互に有利な「日本資源」の利用を妨げたのか。

A. 日本においては、過去10年ほどの間にロシアとの協力による大成功への期待が、悲観へと変化した。日本のビジネス界の最高の熱気は1990年代の初期に現れたのであり、当時、数百を数える日本の企業家や政治家などの「上陸部隊」が、地域の発展の潜在力や展望の調査のために極東の広大な空間に散開したし、そしてまた日本の主として日本海側の事業家たちがロシア経済への投資をあえて行ったが、そういう熱気は急速に消滅した。1990年代初頭にやって来た投資家のうち、ごく少数がロシアの現実に適応できた。日本人は快適なビジネスに惹かれるのであり、法律遵守、政治権力と法制度の安定、相手方における義務履行と規律保持のような正常な企業経営条件の欠如にかんして極めて敏感である。日本人の眼によれば、ロシアはソヴェト国家の欠陥、すなわち攻撃性、拡張主義、国家主義を継承したのみならず、さらにそこでは社会の犯罪化、腐敗、無法事態など、新たな欠陥が生じた。ごく稀な例外を除いて、極東の軍産複合体の民需転換のために日本の技術を導入するというアイデアは無理にみえた。日本との技術格差はあまりにも深刻なことが明らかとなった。日本の高価な消費財は、質が高度であるにもかかわらず、地域住民の貧困化という条件のもとでは、安価な中国製品、しかもしばしば偽造ブランドを付けたそれとの競争に敗れる。ソ

連崩壊直後期の経過の示すところでは、日本との協力は、領土問題が未解決という条件下においても可能である。しかし、その継続には多くの要因が妨げとなる。そのうち若干は以下のよう
にロシアに一般的な性格を持つ、すなわち腐敗、ロシア経済の官僚化、さらに「アジア地域ロシア」のインフラ問題と人口問題、不良な経営環境、極東経済の犯罪化、その他のロシア的災難である。この克服は、もちろん全面的にロシア全体における情勢の正常化にかかっており、「もっぱら日本側における」なんらかの歩み寄りとは関係がない。

B. 長期にわたってロシアにおいては「ロシアのアジア基本戦略」の欠如という事実が影響している。ここで基本戦略とは、巨大な領土ではあるが人口稀薄な「アジア地域ロシア」の地理的・経済的特徴を考慮し、他方において、ロシアの東アジアとの多角的相互活動、およびアジアの隣国との2国間関係の優先的意義を具体的に記述したような文書である。ようやく最近5年間ほど、この方向への動きが現れ始めた。

中国という要因を考慮するのも重要である。例えば最近、北京は近い将来、ロシア経済に上限120億ドルを投資する意向があると報道された。また経済面におけるロシアと中国の新しい協力プロジェクトが作成されつつある。これは日ロ協力に否定的に影響しうるのかどうか.....。

最近年において情勢が変化した。そしてロシアに若干の大企業、例えばトヨタ自動車(株)が進出し、同社はサンクト・ペテルブルグ郊外に150億円(1億2600万ドル)を投じて自動車工場を建設することになる。トヨタの奥田碩会長[当時]は、500名以上のビジネス指導者の出席した会合で「日ロ経済関係に新時代の到来したことを証明しております」と発言した。そのようになることを希望するが....。いずれにしろ「三脚台」の2本目の脚には前途があり、むしろ楽観的側面であると見なされうるが、過去

の経験によれば悲観主義の根拠もまた存在する。

3. 心理面について

心理的側面における両国関係は、日ロの相互関係における非常に重要な部分であるにかかわらず、遺憾ながら、しばしば分析されずに放置されてきた。すでに20世紀の20年代にA. ヨッフェは、日本との関係においては「心理的、政治的、および経済的という三つのカテゴリーの要因を考慮する必要がある」と書いていた。このさい彼が強調したのは、時には上部構造的要因が、とりわけ日本において、その特異な民族心理と関連して、それ自体で価値を持っているということである(ヨッフェ『今日の日本』3ページ)。

袴田茂樹氏は『コンメルサント』紙に「ロシア人は信用できるか」という記事をのせた。そこで彼は「日本人の意識に深く根付いているロシアへの不信」という問題に注意をむけた。そして事実、昨年末に総理府の実施した世論調査によれば、ロシアへの親近感を持つ人は14.7%である(このうち友好的は1.7%、そしてどちらかと言えば友好的が13.0%)。他方、非友好的は81.6%である(このうち、どちらかと言えば非友好的が45.9%、そして非友好的が37.5%)。日ロ関係について21.5%が「良い」と評価し、69.9%は「良いとは思わない」とした。

袴田氏はこういう状況は、日本のメディアがどのようにロシアを描いているかだけでなく、領土問題の未解決に原因があるとした。私はこの主張には、いささか同意できない。私はここでも重要と考えるのは、国のなかで「どのようにして」ロシアのイメージが形成されたのか、そしてメディアと、また書物のなかで記されているかである。ところで[日本では]ロシアについての情報は限られており、またおおむね「否定的」な内容である。

私はここで心理のもつ役割が大きいと考える。

これは大きくて複雑な問題である。ふつう政治家は心理的要因を考慮していない。以下、私は出来るだけ、この問題のある一面にのみ限りたいと思う。

ここで双方とも、相手を理解しようとの気持ちに欠けているというのが主題である。そこで政治家と研究者の責任問題、彼らの自国民と隣国民にたいする責任問題が生ずる。私が思うに遺憾ながら、政治家もまた専門家も両国関係について、そして両方の国において、こういう責任を果たそうとの気持ちを十分には持ちあわせていない。ところが正に彼らが演説、講演、出版物などによって、世論を形成しているのではないか。つまり彼らは、それぞれが自己の実社会の枠内で生活しつつ、しばしば自己の社会の主観的影響をうけており、そのことが歴史や現代にかんする彼らの評価にも影響しているというのが現実である。これを「ゆがんだ愛国主義」と名付けうる。ロシア語では「クワス愛国主義」（酔っぱらい愛国主義、一面的愛国主義）である。その本質は「わが国はつねに正しい、なぜなら、それは、わが国だから」ということである。これはロシアにも、また日本にも存在する。

この種の論者が決まって書くことは、わが国のあらゆる行動は正しいが、他国の行動は誤りなのである。その実例として、そういう専門家による第2次大戦史の解説を示すことができる。ロシアと日本においては、この時期の出来事をまったく別様に見ている。そして、われわれにとってこれは、両国間に理解が成立しない主原因の一つと思われる。日本においては、1945年8月におけるソ連の対日参戦を「火事場泥棒」と見なす、言いかえると恨みと非難をもって想起している。ソ連では長い間、この出来事の評価における日本の論理を理解しなかった。その理由は第1に、日本人の民族性および心理の機微についての本格的研究がなかったからである。日本にはいわゆる「被害者症候群」があり、そ

れが両国関係の根元にひそんでいるということを理解する必要がある。そしてこのことは心理学的によく理解できる。すなわち、日本は伝統的にすべての周辺国から侵略者と見なされていたが、同時に自身が「侵略の犠牲」であるのだ。西洋式の合理的思考法によるのではなく、もし日本の心理を理解しようと努めたならば、心理学の見地から、これはよく解ることである。

ソ連時代においては、そしてまた現ロシアにおいても、日本との対話にさいして、この特徴に配慮していない。それゆえ当初は日本の「非論理的な」立場を理解できない。もっとも以上に述べたことは、日本には第2次大戦中の日本の政策を別様に見る研究者がいないということの意味しない。もちろん、そういう人々は存在する。しかし世論に根ざした一般に受容されているアプローチは、やはり、このような「日本的心性」に基づいている。

他方において、1904～05年の日露戦争時のいろいろな出来事、また張鼓峰事件や、ノモンハン事件におけるロシア側および日本側の行動についてのロシアによる評価を、完全に客観的だということはできない。ここにおいてもまた、一面的な、しばしばイデオロギー的ステレオタイプが優勢である。ロシアの研究者は、日本を厳しく批判するが、日本側の行動の真因を見極める努力をしてこなかった。

これらすべては、私たちの考えによれば、ロシアにおいても、また日本においても誤った愛国主義によって引き起こされた。そのうえ相互に民族性の特徴、相手方の心理、問題の事件が起こった歴史時点における心理的特性などを考慮する努力の欠如によって惹起され、そしてまた相手方が自己特有の国家的利害をどのように評価しているかなどを理解しようとしなかったことによって、そうなっている。

その結果、相手の立場はつねに誤りで、自分のそれは絶対に正しいのである。しかし国民の

心理を考慮することは、国際的領域における特定の国のあれこれの行動の評価にあたって特に重要なのである。

他方、日本においてもロシア人気質の特徴を考慮することはほとんどない。ロシア国家は、外国のロシア領土への侵入について、多数の例に満たされた永きにわたる複雑な歴史を有する。日本にとっては、数世紀にわたって外からの脅威を経験し、絶えず敵の侵入を恐れる人間の精神状態を理解するのは困難である。このためロシア人には（すなわちロシア国のすべての民衆には）すでに遺伝子水準において外からの脅威にたいする恐怖感がある。ところが、このことを日本の研究者や政治家はしばしば無視している。ソ連の時代には以上の意識に加えて、さらにソ連がイデオロギー的にはほぼ全世界と対立しているという事態があり、そしてそれが恐怖を強める要因であった。その結果、ロシア人には独特な愛国意識が形成された。この愛国主義の特徴は、国民大多数がつねに国家の強化、国家の軍事力の増進、国境の防衛などを支持することにある。そして同時に外国の脅威に危惧を感じるのである。日本において、こういうことはほとんど理解されていない。もしこれを理解しないと、なぜロシア国民が領土問題についても日本の立場を受けいれないかを理解するのは難しい。

この意味においてもまた歴史家や政治学者の責任はきわめて重大である。というのは彼らの研究成果にもとづいて、世論を形成する政治家やメディアが活動しているのだからである。

もちろんロシアと日本が近い将来に相互に理解するだろうと考えるのは楽観的にすぎるであろう。しかし双方とも、そうなるように努力を強める必要がある。この場合、あれこれの側の眼前の利害によって右往左往するのではなく、全面的で複合的な、最大限に客観的で、そしてあらゆる国民的な特徴を考慮した問題分析によっ

て行動の方向を決めるべきである。

こういうことで既述の三脚台の第3の脚は今日においても非常に不安定で、ロ日関係のすべての構造をガタつかせているのである。

4. 結語

結論として将来、両国関係において何を期待できるかを考えてみよう。あり得べきシナリオは以下の3種である。

4.1 楽観主義者の眼から見たロ日関係

楽観主義者は、近未来におけるロ日関係を以下のような展望で見ている。国境画定の歴史的に中心的な問題について両国の立場は最終的に決着した。ロシア側は、齒舞・シコタン両島を日本に引き渡すとしている1956年の日ソ共同宣言の条文に厳密にしたがって、平和条約を調印する準備がある。ところが日本はこれに断固として同意せず、さらにクナシリ・エトロフの2島の引き渡しを要求する。

この場合に原則的に重要であるのは、両国とも相互の立場が不動であることを遂に確認する、すなわち、すくなくとも現在において、この問題を調整するのは非現実的であることを理解することである。

これを認識した以上、両国は実は平和条約の協議を休止する用意があるということである。両国はこの問題について静かな対話は続行する。しかしその過程を公然と論評しないだろうし、そのうえ自己の成功または失敗の時期尚早な発表によって、ロシアや日本の世論を騒がせたりはしないだろう。

これは、ロ日関係が成功裡に発展することの担保となるであろう。

新しい国際的諸条件には、このために今までなかったような良い可能性が存在するが、これについては既に本報告の冒頭で述べた。

経済・通商関係の分野では、ロシアと日本において、動機の平準化が認められたかのようで

ある。ロシアにとって、いくらか動機が低下したようだが、逆に日本においてはそれが次第に増大している。政治的な意志があれば、これは従来よりも安定したものになりうるし、また長期協力モデルを作成するための基礎となりうる。このような意志の存在については、ロシア大統領と日本国首相によって調印された「ロ日行動計画」が証明している。

それとともに同盟に近いような関係になれば、いずれ時とともにロシアと日本は、また新規に国境画定問題の調整に着手しうることになることが望みうる。結局、敵対者のあいだでは完全に不可能、また単なる友人間では有りそうもないことが、親友や同盟者のあいだでは達成しうることになることも稀ではない。

4.2 悲観主義者の眼から見たロ日関係

悲観主義者の見地では、日本の世論も、また日本の政治家たちも平和条約の協議の休止に同意しないだろう。日本の政治の不文律は、ロシアとの関係発展の成果をはかる主要基準が、国境画定にかんする問題解決の進展の度合いにあるということであり、これの変更は許されない。他方、ロシアの世論は、新たに国境画定問題を先鋭化するという、日本側の意向の何らかの兆候にたいして、するどく反発するであろう。現在のような国内また国外の複雑な諸条件においては、ロシアの大統領にとっても、また他の政治家にとっても、民衆の意向にきわめて慎重に配慮しつつ、自己の立場を定めなければならない。遅かれ早かれ「日本の動きにたいするロシアの反発、またロシアの動きにたいする日本の反発」というありふれたサイクルの反復が、また新しく国境画定問題についての論争のエスカレーションをもたらすであろう。

理論的には広範な国際問題についてロシアと日本の利害が近い、また合致するということは可能であり、また現にそうである。しかし実際には、これはほとんど何も変えない。ロシアの

アメリカとの関係における何らかの冷却化は、ほぼ自動的にロシアの日本との関係にも影響する。ところでアメリカとの関係を大事にしている日本が、ロシアとの長期的な、そして多分に厄介な政治的協力に乗り出す用意があるのだろうか。

ロシアと日本との経済・通商協力は従来のようにあまり有望ではない。日本の見地からすると、ロシアではまともな長期投資の条件がつくられていない。ロシアはこれを自覚しつつも、事態を変える状況にない。経済協力の機関車であるかのように、ロシア産エネルギー資源の日本への輸出に望みをかけるのは、どう考えても極めて誇張されており、またこれ自体は明らかに景気変動に左右される。これは特に、良いことへの期待を満載するが、ほぼ完全に事実の裏付けを欠いている「ロ日行動計画」を分析すれば再確認できる。こうして将来いつの日か、ロ日関係が同盟に近い水準になっていくと期待するのはナイーブである。近未来においてロシアと日本は、近いというよりも、むしろ遠い隣国として運命づけられている。

4.3 現実主義者（すなわち筆者）の眼から見たロ日関係

ロシアでは、悲観主義者とは良く事情に通じた楽観主義者のことだと言われている。厳密に言えば、楽観主義者と悲観主義者はどちらも正しい。正にここにロ日関係の逆説がある。情勢はこちらにも、またあちらにも動きうる。良好な政治情勢のもとでは、特定の限界内において楽観主義的バリエーションが可能である。もちろん楽観主義者はまさに心理的要因を考慮せず、考察にあたって形式論理により理想的な状況から出発している。しかし人間の行動においては、そして政治家もまた人間であるのだが、主観が大きい役割を演ずる。私が思うに、政治家もまた理想的なプロセスの展開を妨げるであろう。領土問題に重点を置くのは、私には正に主観主

義的アプローチであると思われる。と言うのは領土問題は両国の死活的利害にはあたらない。[東アジア]地域全体にとって重要な両国関係の展望という事態を、両国にとってのみ意義を持つにすぎない個別的な具体問題の下位に置くのは誤っていると思われる。将来を見る悲観主義者の見地は、より根拠を持つように見えるが、しかし私にはしっくりしない、と言うのは、それは停滞だからである。大事なことは前進である。

自分自身の見地を、私は楽観主義的悲観主義と名付けたい。ロ日関係についてブレイクスルー、あるいは逆に急激な悪化を予想できるだろうか。両国が協力できる分野が存在するし、私は協力することを希望するが、このためには両国の側から、とりわけ実際にかなった戦略的アプローチが必要である。

この協力は安全保障、政治そして経済の諸問題、また領土問題などでの対話を並行的に発展させる過程において可能である。東京の指導部が、ロシアの東シベリアと極東の資源が戦略的予備となり得るし、これによって日本は自国のエネルギー面の安全保障の確保という長期的課題を解決できだろうと考えるようになることも有りうる。そして同時に、これは中国の台頭にうまく対処させるであろう。

この長い道のりへの第1歩は、ロシアとの協力について、現在すでに存在する（日本海沿岸）エリートの関心を日本政府が刺激することにあ

るかもしれない。これは全く日本海沿岸地域の利益にかなうことである。もちろん、このためにはロシア側からの努力もまた必要であり、日本側からの協力にとって魅力あるものにしなければならない。

ところで楽観主義の第3の構成要因、すなわち心理的要因については、多大の時間と、両国協同の努力が必要とされる。それゆえ[ロ日関係については]、なお長期にわたる現状維持、そしてそのさい楽観的バリエーションの気配への若干の前進をとまなう現状維持を予想できよう。

（藤田整訳）

* * * *

II. V. コジェヴニコフ報告に触発された日本側のコメント

藤田 整⁽³⁾

5. 報告内容へのコメント

コジェヴニコフ報告は日ロ間の国際関係を政治面、経済面、心理面の三面にわけて論じており、このうち特に心理面（正確には深層心理）について論じた内容にかなり新味があり、ゆえに興味ぶかい。以下、彼の報告のうち、特に注目すべき論点について指摘する。

報告においては、まず政治面を論じている。彼の主張は、日ロ関係における懸案として、もちろん領土問題は基盤として存在する。しかしそれはそれとして現在、世界をめぐる各種の国際問題において日ロ両国の外交的行動方針が、

(3) 私こと藤田整は1928年生まれ。専門は経済学で、分野は比較経済体制論のうち、特にソ連経済である。主著は『ソヴェト商品生産論——社会主義経済におけるその半永久的存続』世界思想社、1991年。主著刊行の直前に定年退職し、またその半年後に研究テーマのソ連経済が消滅したこともあり、以後、私は専門論文を執筆していない。現状は引退研究者である。ただ私は13歳の中学生であった1941年6月22日、「ある晴れた日曜日」の夕刻、ラジオで独ソ開戦のニュースを聞いたこと、また17歳の高校時代の1945年8月15日正午、敗戦を告知する玉音放送を聞いたことを明瞭に記憶し

ている。後者の場所は東武線太田駅（群馬県）プラットホームで、眼前には三菱重工業とともに、日本の軍用機生産の主力をつとめた中島飛行機・太田工場の爆撃による廃墟が横たわり、少年にも敗戦の理由は十分に納得できた。そういう人生を経てきたので、今回、十数年の空白後にやや長い文章の執筆を志したのは、以上のように私自身が今や年々ますます少数となりつつある第2次大戦前後時代の体験者の一人であり、しかも「北方領土問題」は日本のいわば「国民的課題」であるので、私も多少、独自の視点を提示できるかと考えたからである。

ほぼ一致、または完全に一致している事項が多々あると指摘、しかし日本側はそのことを軽視するとしている。一種の導入部といえる。

次いで経済面に移っているが、そこではロシア経済の弱点についての率直な指摘がある。すでにソ連時代の末期、国民経済は不調に陥っていたが、1991年末におけるソ連体制崩壊後、1990年代のロシア経済は、社会主義から資本主義へという、それこそ未曾有の体制転換の過程で各種の混乱を引き起こした。この内容についてロシア経済全般、とりわけ極東地域における状況が、自己批判とも言える筆致で記されている。これは「2. 経済面について」の“A”項において際だっており、外国人の私がこれ以上の補足の必要を感じないほど徹底している。⁽⁴⁾

報告において最も注目されるのは国民の心理に関する記述であり、従来におけるロシア側の論調と比べると、このように詳細、また率直なものは珍しい。まず日ロ関係に関する世論調査の数字の引用につづいて、一国の世論形成における有識者および政治家の指導性と責任の重要性を指摘する。次いでこれらエリートが、自ら先頭に立って吹き込んで形成した「世論」によって、こんどは逆に自縄自縛になるという相互関係を指摘する。そしてこういう循環のプロセスが、客観的また冷静に過去および現在の事態を判断することを妨げ、感情的に自国利益を一面的に吹聴するという傾向を生み出したし、また現在でもそういう傾向が日ロ両国において存在すると指摘している。⁽⁵⁾

次いでロシア人の深層心理として、外国に侵略された苦難の歴史という国民的記憶が、ロシア民族のDNA（遺伝子）水準において刻印されているとする。これは報告のうち「相手の立場はつねに誤りで、自分のそれは絶対に正しい」というような、両国の一部に現在も存在する一

面的態度に自省をもとめたのち、段落を改めて「他方、日本においてもロシア人気質の特徴を考慮することはほとんどない」⁽⁶⁾とされる箇所以下に明瞭に記されている。私自身もソ連経済を専門としたため、研究の周辺領域としてロシア史の通史を読んだことはある。そろそろ20年以上となる読後記憶によれば、ロシアの受けた侵略の歴史事象はなるほど多い。モンゴル族による侵略以降に限っても、ポーランド王国軍、スウェーデン王国軍、ナポレオン指揮下のフランス軍、1917年革命直後の列強による干渉戦争（日本軍のシベリア出兵はこの一部）、ナチ・ドイツ軍による侵略など、国境紛争を除いて、明確にロシア領とされる地域への大規模侵略の歴史は、いま私はあえて資料を参照せず、記憶のみによっても直ちに以上を列挙できた。確かに数も多く、規模も大きい。しかし私はロシア関係の研究者であるにも拘わらず、ロシアの人々が外国の侵略に対してこれほど敏感であるとは、この報告を聞くまで知らなかった。確かに相互理解不足の重要な側面であり、顧みて日本は幸福な国である。

この辺のロシア認識が日本に大きく不足していると考える。その一例として今回、私が想起したのはサンクト・ペテルブルグ市の海岸に立つピョートル大帝の銅像である。ロシアの国民的詩人プーシキンによって「青銅の騎士」とも讃えられた人物のこの有名な銅像は、(1)なぜ北方の海をにらんでいるのか、また(2)彼の乗馬は脚下に大きな蛇を踏みつけているが、その意味は何か。このロシア人にとって忘却できない寓意も、現地でガイドの説明をうけた日本人旅行者の大半は帰国までに忘却しているのではないか。

報告の「結語」の最初の部分「4.1 楽観主義者....」の項の最終部分に、日ロ関係が「同

(4) 本稿63ページ右側

(5) 本稿65ページ

(6) 本稿66ページ左側

盟関係」に近くななければ、他の2島は返せないし、帰らないとしている。これは日ロ関係に限らず、日本の外交、まずは東アジア外交が思想的に「善隣外交」を国是として、一皮も二皮も脱皮しなければ、展望は開けないとの指摘であろう。⁽⁷⁾

さらに「4.2 悲観主義者...」の項においては、ロシアの内情はまだ不安定で、国内各所に不満が充満している。従って政治指導者はきわめて慎重に民意を推し量りつつ、事を進めねばならないのが現段階であるとの指摘がある。⁽⁸⁾確かにロシアでは経済の再建も未だし、現状はバランスのとれた工業国とは程遠く、主要な輸出品といえばエネルギー、鉱物資源および兵器というように偏っている。従って国民各層のあいだの経済格差は大きく、民心は不安定である。換言すると、国民一般は誰かにプレゼントを贈るというような余裕のある心境とは程遠いということである。日本はこういうロシア現在の国情をよく認識しなければ、当然、その国との交渉ごとが成功しないのは目に見えている。

6. 日本人の深層心理

日本人は、代々、アジア大陸の東端の島国(islands nation)に生存し、その地理的位置により外界から遮断された状況に基づく孤立主義、自足主義という心理を持つ。従って外国との交際には慣れで、また総じて下手である。

悠久の歴史の視点からすれば、つい最近の幕末まで日本は島国で自足しており、親子代々、メンバー・チェンジの極めてゆるやかな社会構成をなし、ゆえに「改まった」説明は一般に不要な社会である。例えば物事を処理するさい、関係者にたいしては「察してくれ。言わんでも判ってるだろう」という調子で、それで通って

いくような人間関係が普通であった。

1,500年にわたる日本史において外国からの侵略といえば、第2次大戦時の沖縄戦をのぞき、13世紀にフビライ汗をいただく元帝国による文永の役(1274年)と弘安の役(1281年)のシリーズのみである。そして日本人にとって対外戦争での敗北体験は、第2次大戦での敗戦が初めてで、しかも唯一のものである。従って政治的にも心理的にも、戦争での「負け方」になれていない。例えば1940年9月、米英に対抗して「日独伊3国同盟」を結成した枢軸国は、いずれも第2次大戦で敗戦国という運命に見舞われた。ところで、このうち国家として「敗戦処理」に最も長けていたのはイタリアであろう。イタリアには少なくともヨーロッパを主舞台に約3千年にわたって鍛えられた高度の国際政治的DNAが存在するとみえる。したがって第2次大戦での敗北にもかかわらず、周知のようにイタリアは現在、ローマ帝国以来2千年にわたる本土を保全している。

北方領土は日ロ間における最初の条約である1855年の「日露通好条約」第2条によって、まったく平和裡に日本の領土と確定したものである。従って北方領土は我が国の「固有の領土」という考えを素直に受け入れる心理的素地がある。ところが他方、千島列島はエトロフ島とウルップ島を境に、歴史的経緯を異にする南北2地域にわかれるという認識は、第2次大戦後半期に戦後方策の大綱を取り仕切ったアメリカ・イギリスの最高指導者の頭にはなかったとみえる。このことが日本人に大きい不幸をもたらした。そして、この件について日本が米英に指摘することも、またこれを訂正する外交的努力についても、日本国民は知らない。そして現在、北方領土は南北の違いを分けないで、単に「千島列島」と記す1945年2月に米英ソ最高首脳によっ

(7)本稿67ページ左側

(8)同上

て署名された「ヤルタ協定」第3項の実効支配下にある。

第2次大戦での敗北にからみ、日本人の持つロシアにたいする不愉快な記憶については、北方領土のほかにも以下2件を挙げておきたい。

第1は、第2次大戦終結の直前、アメリカなどに教唆されたとしても、日ソ中立条約を破って、1945年8月9日以降、ソ連軍が旧満州に侵入したさいの行状である。当時、旧満州には軍人を除いて、百万名前後の日本の民間人が在住していた。彼らは収容所生活をへて、ほぼ1～2年後に日本に帰還するが、その間、まずソ連軍、ついで毛沢東指導下の八路軍（人民解放軍の前身）、最後に蒋介石指導下の国民党軍という3種の軍隊とつぎつぎに接するという珍しい体験をした。日本の民間人にたいするソ連軍の規律は劣悪で、略奪・暴行が日常茶飯事とされた。軍規が相対的に優秀であったのは八路軍で、国民党軍は八路軍より劣ったといわれる。事件から半世紀、ソ連崩壊後に若年の一ロシア人学者の話によると、当時、旧満州に侵入したソ連軍の最前線に配置されたのは、ソ連の囚人を主体とする突撃部隊であったといわれる。

第2にソ連は、戦争終了後に「ポツダム宣言」第9条、その他の国際法に違反して、60万名前後の日本軍捕虜をシベリアに連行し、飢餓と寒冷のもと、多くは3～4年にわたって重労働に従事させたことである。その約1割が現地で死亡し、祖国に帰還できなかった。この出来事の苦難の歴史について日本では千冊をこえる体験記が出版され、最近においても未だに新しい記録が出版されている。私自身も百冊前後を所有し、半世紀以上にわたって断続的に、そのほとんどに目を通した。本稿では紙面がないので、それらの代表として2点を末尾の参考文献欄に掲げる。

ちなみに1941年6月22日、ナチ・ドイツは独ソ不可侵条約に違反してソ連に宣戦を布告した。

これについてスターリンは、1941年7月3日の有名なソ連国民むけラジオ演説において、この攻撃が「背信的」(verolomnyj)なものであると繰り返して非難した。ところが今度は1945年8月9日、当のソ連が日ソ中立条約に違反して日本に宣戦を布告したわけである。以上の旧日本軍兵士の平和回復後におけるシベリア抑留は、このソ連による攻撃につづく不法行為である。

ところで以上の2件は過去の事件である。いかに過酷な経験であっても、時間の流れによって直接の当事者は徐々に減少する。それに伴い、過酷な体験にたいする国民感情もまたしだいに和らぐ。ところが北方領土問題の深刻さは以上とは異なる。それは過去から引きつがれた問題とはいえ、むしろ現在の問題である。知床半島の峠に立てば、クナシリ島はその圧倒的な偉容をもって、われわれの眼前に迫る。それを見つめる多数の日本人の周辺には、時間が止まったかのような静寂が支配している。しかし、そこは現在、ロシア連邦共和国の主権の実効支配下にある。これが現実である以上、北方領土問題はつねに生々しく現在の問題として甦ってくることになる。

7. 日本のかかえる国境紛争

現在、日本のかかわる国境紛争としては、北方領土問題のほかにも、①韓国との間に竹島（韓国名：独島）問題、②中国との間に尖閣諸島（中国名：釣魚台）問題がある。これらのやっかいな領土問題については、従来のように双方とも、相手方は聞く耳をもたない、そして自国に有利な「古地図」を根拠に振りかざす体の「主権 vs. 主権」の激突アプローチを、たとえ今後百年間、間歇的に反復しても、何ら生産的な解決案は出てこないのではないのか。21世紀においては新しい発想が必要であろう。国境紛争については、お互いに隣接国であるという「厳然たる現実」より出発して、いわゆる「落とし

所」を慎重に探るより他に道はないであろう。
そして将来の人類社会において国境紛争については、現在のように「排他的国家主権」にもとづく領有権よりも、むしろ利用権、それも互恵的な利用権、さらには共同利用の方向に問題解決の道があるのではないか。（2009.1.17）

参考文献

- ①岩下明宏『北方領土問題』中公新書、2005年。
- ②カント『永遠平和のために』（宇都宮芳明訳）、岩波文庫、1985年。
- ③塩川伸明『民族とネーション——ナショナリズムという難問』岩波新書、2008年。
- ④司馬遼太郎『ロシアについて——北方の原型』文藝春秋、1986年。
- ⑤スラヴィンスキー・ボリス『考証・日ソ中立条約——公開されたロシア外務省機密文書』（高橋実・江沢和弘訳）、岩波書店、1996年。
- ⑥高杉一郎『極光のかげに シベリア俘虜記』目黒書店、1950年（岩波文庫、1991年）。
- ⑦『日露（ソ連）基本文書・資料集（改訂版）』（末澤昌二・茂田宏・川端一郎編・著）、RPプリンティング発行、2003年。
- ⑧保阪正康『日本陸軍の研究』（上・下）、朝日文庫、2006年。
- ⑨『捕虜体験記』全8巻、ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会（代表・高橋大造）編集・発行、1984～1998年。
- ⑩メドヴェージェフ・ロイ『スターリンと日本』（佐々木洋・対談と評注；海野幸男訳）、現代思潮新社、2007年。